

乳房2次検診センター

■検診を指導・協力した先生

落合和彦

東京産婦人科医会会長

角田博子

聖路加国際病院放射線科
乳房画像診断室室長

坂 佳奈子

東京都予防医学協会がん検診・診断部長

福田 護

聖マリアンナ医科大学附属研究所プレスト&
イメージング先端医療センター附属クリニック院長

(50音順)

■検診の方法とシステム

東京都予防医学協会(以下、本会)内に設けられた「乳房2次検診センター」は、乳がん検診が視触診単独検診であった1981(昭和56)年に東京産婦人科医会(以下、医会/旧東京母性保護医協会)との協力によって設立された。1次検診(問診、視触診)を医会会員の施設で実施し、2次検診が必要とされた方について、予約制で本会の乳房2次検診センターで精密検査(問診、視触診、マンモグラフィ、乳房超音波検査、細胞診)を実施する方式で開始された。

2000(平成12)年より厚生労働省の通達にて、乳がん検診の主体が視触診単独検診からマンモグラフィ併用検診に変更され、2004年から本会の施設内あるいはマンモグラフィ搭載車でマンモグラフィによる乳がん検診を実施するようになり、本会の乳房2次検診センターの役割も変貌を遂げつつある。

医会における1次検診は現在ほとんど行われていないが、医会施設にかりつけの方や自覚症状があり医会施設を受診された方の精密検査は引き続き行っている。

検診方式の変化とともに、乳房2次検診センターの役割は本会の1次検診(マンモグラフィもしくは職域検診や人間ドックでの乳房超音波検診)を受診された方の中で要精密検査になった方が2次検診を受ける場となってきている。また乳がん患者の増加とともに、最近では近隣の住民で自覚症状のある方、他機関での1次検診で要精密検査になった方などにも、広く門戸を開いている。

日本乳癌学会および日本乳癌検診学会により「乳がんの精密検査実施機関の基準」が定められ、精密検査施設の精度管理も重要視される時代となり、その基準を満たす装置の設置、資格を有する技師・医師の確保を行い、基準を遵守し、一般の受診者や医会などの医師にも信頼される2次検診センターを目指している。

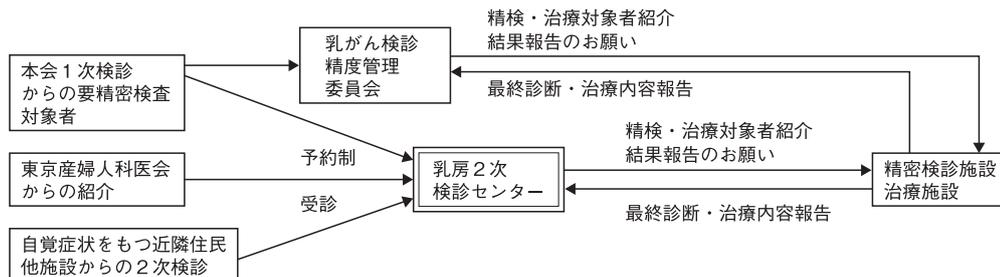
乳房2次検診センターでの精密検査の結果、さらなる精査あるいは治療が必要と判定された受診者については、2次検診の所見を記録した書類に依頼状を添えて、3次検診施設または治療機関に紹介している。

紹介先の3次検診施設または治療機関は、病診連携をとる都内大学病院やがん専門施設などが主ではあるが、受診者自身の住所の関係でさまざまな医療機関にも紹介している。

乳房2次検診センターでは、本会内に設置された乳がん検診精度管理委員会と連携して、さらなる精密検査や治療内容についての報告をしてもらい、データを把握し、検診の精度向上に努めている。

乳房2次検診センターのシステムは下図のとおりである。

乳房2次検診センターのシステム



乳房2次検診センターの実施成績

坂 佳奈子

東京都予防医学協会
がん検診・診断部長

野 木 裕 子

東京慈恵会医科大学附属病院
乳腺内分泌外科

竹 井 淳 子

聖路加国際病院乳腺外科

はじめに

1981(昭和56)年に東京産婦人科医会(以下、医会/旧東京母性保護医協会)の2次検診施設として、東京都予防医学協会(以下、本会)内に乳房2次検診センターが開設された。

2000(平成12)年3月より厚生労働省が50歳以上の女性を対象にマンモグラフィ(以下、MG)検診を併用することを通達し、本会においても2002年にMGパイロットスタディ、2003年に施設内MG検診、2004年からはMG搭載車による車検診を開始した。現在、乳房2次検診センターでは本会で取り扱った1次検診受診者の2次検診(精密検査)を主として実施している。

受診者数と受診動機

受診者数と受診動機を表1に示す。2015年度の受診者数は1,570人であった。2011年度の受診者数は、東日本大震災の影響で2003年度以降で最少となったが、それを除けば2008年度以降は1,500～1,600人前後で推移している。

2007年度までは本会での1次検診の精密検査者を「検診」、医会での視触診検診の精密検査や紹介受診者を「医会」、検診に関係なく自覚症状などによる受診者を「外来」と区分していたが、医会からの紹介が減少する一方で、他施設からの2次検診の依頼や紹介が増加したため、2008年より医会を含め他施設からの紹介を「他施設」とし、区分は「検診」「他施設」「外来」と変更した。

2015年度の内訳は、検診1,103人(70.3%)、他施設206人(13.1%)、外来261人(16.6%)であった。受診者は初診および要管理に分類しているが、再来の人でも1年以上の間隔をあけて受診したものは、別の症状や新たな検診での要精査などで受診したものと考え、データ上は初診扱いとしている。

また、初診は1,151人(73.3%)で、うち検診761人(66.1%)、他施設171人(14.9%)、外来219人

表1 受診者数

(1981～2015年度)

年度	受診者数		
	初 診	要管理 (再来)	計
1981～88	3,958	1,594	5,552
1989～96	3,215	2,390	5,605
1997～01	1,572	1,610	3,182
2002	662	483	1,145
2003	838	704	1,542
2004	766	904	1,670
2005	790	863	1,653
2006	639	839	1,478
2007	991	465	1,456
2008	1,092	475	1,567
2009	1,098	538	1,636
2010	1,084	486	1,570
2011	907	405	1,312
検 診	598	293	891
他施設	151	65	216
外 来	158	47	205
2012	1,174	392	1,566
検 診	877	325	1,202
他施設	167	42	209
外 来	130	25	155
2013	1,104	473	1,577
検 診	836	488	1,224
他施設	137	49	186
外 来	131	36	167
2014	1,070	484	1,554
検 診	785	404	1,189
他施設	136	43	179
外 来	149	37	186
2015	1,151	419	1,570
検 診	761	342	1,103
他施設	171	35	206
外 来	219	42	261

(19.0%)であった。当施設は、当初は医会の2次検診施設として開設されたが、乳がん検診の変化に伴い、最近では本会の1次検診の精密検査施設としての役割が増えている。また、自覚症状などによる「外来」は、自己触診の浸透など、女性の乳がんに対する意識の変化があると考えられ、この区分の役割は今後も重要であると考えられる。

初診受診者の割合は、2010年度は69.0%、2011年度69.1%、2012年度75.0%、2013年度70%、2014年度68.9%、2015年度は73.3%と、60%台後半から75%くらいの間で推移している。初診受診者の増加は、精密検査の対象になった人に対する精検センターとして機能していること、また検査の結果管理不要となった受診者に関しては、速やかに検診に戻す態勢が徐々に整いつつあることの表れであると思われる。しかしながら、経過観察が必要な症例は相当数存在するので、初診者の割合は

70%台程度で一定化するのかもしれない。今後の推移を見守りたい。

受診者の年齢構成

2015年度の受診者の年齢構成を表2に示す。

40～49歳が616人(39.2%)、50～59歳が427人(27.2%)で、合わせて66.4%となり、この年代の分布が過半数を超えている。この分布は乳がんの好発年齢と一致しており、この年齢層の受診者が増加してきていることは精密検査機関としては好ましい傾向だと思われる。

受診者の臨床診断

表3に受診者の臨床診断を示す。以前の分類では「乳頭部痛」や「乳頭異常分泌」など、診断名と症状名の混在があったが、2008年度よりすべて診断名で統一した。したがって、以前の分類とやや異

表2 受診者の年齢構成

年度	年齢 (1981～2015年度)												計
	～19歳	20～24	25～29	30～34	35～39	40～44	45～49	50～54	55～59	60～64	65～69	70歳～	
1981～88	65	272	420	658	811	705	543	250	108	71	36	19	3,958
1989～96	39	169	257	463	510	623	529	277	175	100	47	26	3,215
1997～01	9	29	93	236	268	254	290	181	109	55	32	16	1,572
2002	3	11	29	79	102	113	109	95	65	30	20	6	662
2003	0	13	32	90	119	162	135	122	70	46	30	19	838
2004	0	3	16	73	82	121	137	122	107	56	30	19	766
2005	2	4	22	53	71	136	128	134	124	73	30	13	790
2006	1	4	12	37	54	126	116	99	85	54	27	24	639
2007	0	4	9	57	93	161	181	176	137	88	50	35	991
2008	0	7	22	50	121	179	176	175	145	103	61	53	1,092
2009	1	11	23	54	101	186	178	173	135	123	63	50	1,098
2010	3	10	24	53	72	204	207	169	116	141	42	43	1,084
2011	0	5	20	47	63	170	157	135	104	115	45	46	907
検診	0	1	7	25	28	116	106	95	74	95	28	23	598
他施設	0	2	3	11	16	27	25	30	11	10	6	10	151
外来	0	2	10	11	19	27	26	10	19	10	11	13	158
2012	3	6	17	59	74	228	240	178	113	146	60	50	1,174
検診	0	1	8	39	39	176	190	140	85	120	43	36	877
他施設	0	1	5	9	15	33	27	26	20	12	12	7	167
外来	3	4	4	11	20	19	23	12	8	14	5	7	130
2013	2	9	18	44	67	210	221	183	122	117	52	59	1,104
検診	0	1	11	26	35	154	178	151	103	93	41	43	836
他施設	1	2	1	12	10	32	17	22	13	18	4	5	137
外来	1	6	6	6	22	24	26	10	6	6	7	11	131
2014	1	10	21	63	89	316	315	245	196	147	86	65	1,554
検診	0	6	9	37	47	267	248	178	163	118	64	52	1,189
他施設	1	0	2	11	19	24	31	41	16	15	14	5	179
外来	0	4	10	15	23	25	36	26	17	14	8	8	186
2015	1	13	27	62	93	314	302	258	169	128	111	92	1,570
検診	0	2	13	34	43	245	220	171	121	91	93	70	1,103
他施設	0	3	4	6	20	34	35	46	22	18	11	7	206
外来	1	8	10	22	30	35	47	41	26	19	7	15	261

表3 受診者の臨床診断

(2008～2015年度)

年度	診断 乳腺症	乳腺 腫瘍	乳腺 線維腺腫	がん及び がん疑い	のう 胞症	乳管 拡張症	乳管内 腫瘍	のう胞内 腫瘍	葉状 腫瘍	正 常	そ の 他	計
2008	364	25	138	93	261	8	4	6	2	281	30	1,212
(%)	(30.0)	(2.1)	(11.4)	(7.7)	(21.5)	(0.7)	(0.3)	(0.5)	(0.2)	(23.2)	(2.5)	(100.0)
2009	541	55	271	115	360	5	7	8	0	318	33	1,713
(%)	(31.6)	(3.2)	(15.8)	(6.7)	(21.0)	(0.3)	(0.4)	(0.5)	(0.0)	(18.6)	(1.9)	(100.0)
2010	218	37	153	89	304	3	5	3	0	258	14	1,084
(%)	(20.1)	(3.4)	(14.1)	(8.2)	(28.1)	(0.3)	(0.3)	(0.3)	(0.0)	(23.8)	(1.3)	(100.0)
2011	196	30	97	77	293	2	1	3	1	197	10	907
（ 検 診	150	17	65	61	194	0	0	3	0	104	4	598
他施設	26	7	21	7	46	1	1	0	1	40	1	151
外 来	20	6	11	9	53	1	0	0	0	53	5	158
(%)	(21.6)	(3.3)	(10.7)	(8.5)	(32.3)	(0.2)	(0.1)	(0.3)	(0.1)	(21.8)	(1.1)	(100.0)
2012	275	52	179	124	449	4	8	5	0	220	18	1,334
（ 検 診	228	39	137	111	315	2	6	5	0	139	11	993
他施設	21	4	21	7	50	0	0	0	0	39	6	148
外 来	26	9	21	6	84	2	2	0	0	42	1	193
(%)	(20.6)	(3.9)	(13.4)	(9.3)	(33.7)	(0.3)	(0.6)	(0.4)	(0.0)	(16.5)	(1.3)	(100.0)
2013	425	57	282	102	561	4	7	1	0	230	33	1,702
（ 検 診	376	49	206	86	424	2	6	1	0	145	20	1,315
他施設	33	4	46	8	78	2	0	0	0	36	5	212
外 来	16	4	30	8	59	0	1	0	0	49	8	175
(%)	(25.0)	(3.3)	(16.6)	(6.0)	(33.0)	(0.2)	(0.4)	(0.1)	(0.0)	(13.5)	(1.9)	(100.0)
2014	427	65	419	93	400	3	43	4	0	224	27	1,705
（ 検 診	370	56	332	75	273	2	35	4	0	155	14	1,316
他施設	38	5	48	8	70	1	4	0	0	25	2	201
外 来	19	4	39	10	57	0	4	0	0	44	11	188
(%)	(25.0)	(3.8)	(24.6)	(5.5)	(23.5)	(0.2)	(2.5)	(0.2)	(0.0)	(13.1)	(1.6)	(100.0)
2015	240	39	256	101	590	5	77	7	0	285	41	1,641
（ 検 診	184	28	185	83	407	4	62	4	0	153	24	1,134
他施設	36	7	32	5	95	1	9	1	0	39	3	228
外 来	20	4	39	13	88	0	6	2	0	93	14	279
(%)	(14.6)	(2.4)	(15.6)	(6.2)	(36.0)	(0.3)	(4.7)	(0.4)	(0.0)	(17.4)	(2.5)	(100.0)

(注) 病名はのべ人数となっている。複数病名のある場合もすべてカウントしている
その他…乳腺腫瘍、脂肪腫、粉瘤、女性化乳房 など

なっている。

2015年度の受診者全体のうち、乳がんまたは乳がん疑いが101例(6.2%)と、2014年度の93件(5.5%)と2013年の6%より増加した。

良性疾患では、乳腺症240件(14.6%)、のう胞症590件(36.0%)、乳腺線維腺腫256件(15.6%)であった。また正常(異常なし)は285件(17.4%)であった。

乳房2次検診センターでの管理区分

乳房2次検診センターでの受診後の管理区分を表4に示す。

569人(49.4%)は「異常なし」あるいは「差し支えなし」として定期検診へ戻った。499人(43.4%)は「要管理」として2次検診センターでの経過観察を

続けることになった。

1次検診のMGでの局所的非対称性陰影や視触診検診での腫瘍の疑いは、超音波検査(US)で所見がない、あるいは明らかな良性病変であると判断できれば、定期検診に戻すことを原則としているが、MGでの微細石灰化陰影は、良性の可能性がある程度高い場合でも変化を確認することが重要であり、しばらくの間、経過観察となる症例が多い。

初診者のうち要管理に区分されたのは、2011年度43.8%、2012年度45.5%、2013年度43.8%、2014年度42.0%、2015年度43.4%であり、最近は40%台半ばで推移している。経過観察の受診者が増え、初診に当たる精密検査の対象者が予約を取りにくい現状があり、2次検診センターの問題点の一つとなっていた。

表4 受診者の判定区分

(2002～2015年度)

年度	定期 検診	要管理	要精密 検査	要 治 療		計
				良 性	が ん	
2002	292	338	20	1	11	662
2003	370	416	39	2	11	838
2004	322	324	96	5	19	766
2005	366	333	84	3	4	790
2006	235	316	69	3	16	639
2007	301	561	93	1	35	991
2008	408	512	66	0	34	1,092
2009	498	483	62	2	53	1,098
2010	568	410	75	0	31	1,084
2011	424	397	67	0	19	907
検 診	249	281	57	0	11	598
他施設	69	76	4	0	2	151
外 来	106	40	6	0	6	158
(%)	(46.7)	(43.8)	(7.4)	(0.0)	(2.1)	(100.0)
2012	506	534	112	1	21	1,174
検 診	330	428	101	0	18	877
他施設	87	73	6	1	0	167
外 来	89	33	5	0	3	130
(%)	(43.1)	(45.5)	(9.5)	(0.1)	(1.8)	(100.0)
2013	512	484	75	4	29	1,104
検 診	341	406	62	2	25	836
他施設	84	46	6	0	1	137
外 来	87	32	7	2	3	131
(%)	(46.4)	(43.8)	(6.8)	(0.4)	(2.6)	(100.0)
2014	533	449	53	1	34	1,070
検 診	332	381	47	1	24	785
他施設	90	41	2	0	3	136
外 来	111	27	4	0	7	149
(%)	(49.8)	(42.0)	(5.0)	(0.1)	(3.2)	(100.0)
2015	569	499	35	3	45	1,151
検 診	286	406	33	2	34	761
他施設	106	62	0	0	3	171
外 来	177	31	2	1	8	219
(%)	(49.4)	(43.4)	(3.0)	(0.3)	(3.9)	(100.0)

(注) 初診者のみ

以前は、受診者の希望があれば異常のない場合でも要管理にして定期通院の受け入れをしていたが、予約数が増加するにしたがって新たな精密検査対象者の受け入れができない状況を招きつつあった。そこで、ここ数年「異常なし」を正しく「異常なし」と診断し、不要な経過観察を減らす努力を行ってきた。また紹介元が他施設の場合は紹介元での要管理をすすめ、MGなどの必要時に2次検診センターへの受診をすすめるようにしている。このような方針の転換は、乳がんの罹患率の増加や乳がん検診の普及に伴いやむを得ないことと考える。

しかしながら、受診者が自らの地元で安価な費用で検診を受けられるように誘導することは、受診者のさまざまな負担を軽減する上、さらには新たな要精密検査の対象者を受け入れる余地ができるなどよい面も多く、精密検査施設の2次精検センターとして望ましい形になりつつあると考えてい

る。

2015年度の初診者のうち要精密検査は35人(3.0%)、がんなどで要治療は45人(3.9%)となっている。以前は良性疾患で手術などの治療をすることもあったが、最近では良性疾患については経過観察や検診受診でよいとの方針が一般的となっている。ただ、大きな線維腺腫で本人が切除を希望する場合や、葉状腫瘍では10%程度に悪性の症例が合併するので、そのようなケースでは切除することもある。今回は良性の要治療例が3人(0.3%)見られた。

治療機関から報告された診断名

治療機関から報告された診断名を表5に示す。2015年度は91人(94病変)を3次精密医療機関へ紹介し、最終結果が把握できたものは94病変(回答率100%)であった。2011年度96.7%、2012年度97.2%、2013年度98.3%、2014年度100%と、この2年間は100%のご回答をいただいている。これは追跡調査を定期的に行うシステム作りや、看護師などスタッフの努力の賜物と考えている。また、連携している精査・治療病院の先生方のご協力にも感謝申し上げたい。

乳がんは74例であった。陽性反応適中度78.7%であり、2011年度66.3%、2012年62.7%、2013年63.9%、2014年75.3%と右肩上がりで上昇してきている。これは回答率が上昇し、精検結果の把握率が高くなっていること、および精度の高い2次検診を目指して努力している結果と思われる。

病期(ステージ)分類では、ステージ0の非浸潤性乳管癌が7例(9.5%)であった。ステージIが36例(48.6%)で、両者を合わせた早期がんの割合は43例(58.1%)であった。ステージIIが22例(29.8%)、ステージIIIは4例、ステージIVは0例で、比較的進行度の早い段階の乳がんの発見の割合がさらに高くなってきている。今回、病期不明は5例あった。これは昨今、術前化学療法などの手術前の治療が一般的となり、その治療終了が6ヵ月以上

表5 治療機関から報告された診断名
(3次精密検査結果・再来含む)

(2002～2015年度)

	乳がん	乳腺線維腺腫	乳腺症	のう胞症	その他	無回答	計
2002	23	7	4	0	3	7	44
2003	30	9	7	1	17	10	74
2004	45	33	54	11	40	27	210
2005	33	18	17	7	9	35	119
2006	51	14	19	6	11	10	111
2007	61	18	21	3	16	26	145
2008	70	7	21	2	8	11	119
2009	81	6	21	3	17	8	136
2010	77	14	21	1	18	3	134
2011	61	6	12	1	9	3	92
検診	47	6	12	1	6	1	72
他施設	6	0	0	0	1	1	8
外来	8	0	0	0	2	1	11
(%)	(66.3)	(6.5)	(13.1)	(1.1)	(9.8)	(3.3)	(100.0)
2012	89	8	28	4	9	4	142
検診	75	3	28	3	8	3	120
他施設	6	5	0	0	1	0	12
外来	8	0	0	1	0	1	10
(%)	(62.7)	(5.7)	(19.7)	(2.8)	(6.3)	(2.8)	(100.0)
2013	76	7	19	0	15	2	119
検診	64	6	18	0	10	2	100
他施設	6	0	1	0	1	0	8
外来	6	1	0	0	4	0	11
(%)	(63.8)	(5.9)	(16.0)	(0)	(12.6)	(1.7)	(100.0)
2014	73	3	11	1	9	0	97
検診	60	3	10	1	6	0	80
他施設	3	0	1	0	2	0	6
外来	10	0	0	0	1	0	11
(%)	(75.3)	(3.1)	(11.3)	(1.0)	(9.3)	(0.0)	(100.0)
2015	74	3	8	2	7	0	94
検診	61	2	8	1	6	0	78
他施設	3	1	0	0	0	0	4
外来	10	0	0	1	1	0	12
(%)	(78.7)	(3.2)	(8.5)	(2.1)	(7.4)	(0.0)	(100.0)

(注) 2008年度精検者数は118人だが、1人は左右重複で乳がんであるため、計は119人となっている
 2009年度精検者数は131人だが、5人は左右重複で疾患があるため、計は136人となっている(そのうち左右重複で乳がんは4人)
 2010年度精検者数は129人だが、5人は左右重複で疾患があるため、計は134人となっている(そのうち左右重複で乳がんは4人)
 2011年度精検者数は91人だが、1人は重複がんであるため、計は92人となっている
 2012年度精検者数は140人だが、2人は重複がんであるため、計は142人となっている
 2013年度精検者数は114人だが、5人は重複がんであるため、計は119人となっている
 2014年度精検者数は95人だが、2人は重複がんであるため、計は97人となっている
 2015年度精検者数は91人だが、3人は重複がんであるため、計は94人となっている

(2015年度)

	非浸潤性 乳管癌	乳頭 腺管癌	充実 腺管癌	硬 癌	小葉癌	粘液癌	アポクリン 癌	その他	不明	計
検診	9	15	4	23	5	0	2	1	2	61
他施設	0	1	0	1	0	1	0	0	0	3
外来	0	4	1	5	0	0	0	0	0	10
計	9	20	5	29	5	1	2	1	2	74
(%)	(12.2)	(27.0)	(6.8)	(39.2)	(6.8)	(1.4)	(2.7)	(1.4)	(2.7)	(100.0)

(2015年度)

Stage	非浸潤性 乳管癌	乳頭 腺管癌	充実 腺管癌	硬 癌	小葉癌	粘液癌	アポクリン 癌	その他	不明	計	(%)
0	7	0	0	0	0	0	0	0	0	7	9.5
I	0	15	2	15	0	1	2	1	0	36	48.6
IIA	0	4	1	8	4	0	0	0	0	17	23.0
IIB	0	1	1	3	0	0	0	0	0	5	6.8
III	0	0	1	2	1	0	0	0	0	4	5.4
IV	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.0
不明	2	0	0	1	0	0	0	2	0	5	6.8
計	9	20	5	29	5	1	2	3	0	74	100.0

にわたることもあり、その影響で回答が集計に間に合わないことが考えられた。

乳がん発見率

乳がん発見率を表6に示す。2015年度受診者数1,570人のうち乳がんは74例(4.7%)であった。がん発見率は4~6%で今後も推移するのかもしれないが、早期がん割合が増加し続けることを期待している。乳房2次精検センターの役割が多岐にわたり、他施設での要精査者や自覚症状受診の方も一定の割合で存在するため、この区分からのがん発見もさらに増加すると考える。

検診例だけでみると、乳がん発見率は5.6%であった。1997年度以降発見率は2%台であったが、2006年度に3.5%となり、2008年度以降はさらに高くなってきている。特に郊外を中心とした地域などでは、自覚症状のある人が病院へ行かずに検診を受けているケースもあり、それもがん発見率が高い理由の一つと考えられる。今後、繰り返しの受診者が増えるにつれて、がん発見率はやや低下するのではないかと考える。

表6 乳がん患者と発見率

(2002~2015年度)			
年度	受診者数	乳がん	発見率 (%)
2002	1,145	23	2.0
2003	1,542	30	1.9
2004	1,670	45	2.7
2005	1,653	33	2.0
2006	1,478	51	3.5
2007	1,456	61	4.2
2008	1,565	70	4.5
2009	1,636	81	5.0
2010	1,570	77	4.9
2011	1,312	61	4.6
検診	891	47	5.3
他施設	216	6	2.8
外来	205	8	3.9
2012	1,566	89	5.7
検診	1,202	75	6.2
他施設	209	6	2.9
外来	155	8	5.2
2013	1,577	76	4.8
検診	1,224	64	5.2
他施設	186	6	3.2
外来	167	6	3.6
2014	1,554	73	4.7
検診	1,189	60	5.0
他施設	179	3	1.7
外来	186	10	5.4
2015	1,570	74	4.7
検診	1,103	62	5.6
他施設	206	3	1.5
外来	261	9	3.4

施行された治療法

発見された乳がん74例の術式を表7に示す。治療施設から術式の報告は全例で得られた。

近年ではセンチネルリンパ節生検(SNB)を施行するところが増えたことに伴い、2006年度より内訳を提示した。センチネルリンパ節生検とは、センチネルリンパ節(見張り役リンパ節)を病理組織的に検索し、がん細胞の転移がなければ腋窩リンパ節郭清(Ax)を省略する手法である。この方法は乳がん患者の術後の腕のむくみや運動障害の発生を減少させており、乳がん患者のQOL向上に非常に貢献している。2次検診センターで発見される乳がんはステージ0, Iが多く、腋窩リンパ節転移を認めないことが多い。このような患者には縮小手術による恩恵が非常に大きいと思われる。

全乳房切除33人(44.6%)のうちSNB26人(78.8%), Ax7人(21.2%)であった。郭清もSNBも実施していない症例は0例であった。

乳房部分切除(温存手術)36人(48.6%)のうちではSNB30人(83.3%), Ax4人(11.1%)であった。郭清もSNBも実施していない症例は2例(5.6%)認められた。全体的にSNBの比率が増加してきている。

2012年度までは乳房部分切除術の割合が増加していたが、2013年度は全乳房切除の割合が2012年度の20%から41%へと著しく増加した。2015年度もその傾向が続いており、全乳房切除術が44.6%と乳房部分切除術48.6%に近づきつつある。個々の理由については明らかではないが、2013年7月より全乳房切除後の乳房再建が保険適応となり、今までやや無理をして部分切除をしていた症例に対して乳房切除を行い、一次的に再建する方針に転換した施設もあることが最も考えられる理由であろう。

非触知腫瘍で自覚症状がないものの、MGによって広範囲に微細石灰化を認める非浸潤性乳管癌の場合、非常に早期であるにもかかわらず全乳房を切除しなくてはならないことが多く、患者の失望

表7 乳がん発見患者が受けた治療

(2003～2015年度)

年度	全乳房切除術	乳房部分切除術	その他	不明	計
2003	1	22	0	8	31
2004	9	26	0	8	43
2005	4	22	0	7	33
2006	11	34	5	5	55
2007	9	49	1	2	61

年度	全乳房切除術 (%)	乳房部分切除術 (%)	術前療法中 (%)	手術適応外 (%)	不明 (%)	計 (%)
2008	21	48	0	1	0	70
2009	15	64	2	0	0	81
2010	24 (31)	47 (61)	3 (4)	0 (0)	3 (4)	77 (100)
2011	19 (31)	36 (59)	2 (3)	0 (0)	4 (7)	61 (100)
2012	18 (20)	68 (76)	0 (0)	0 (0)	3 (4)	89 (100)
2013	31 (41)	39 (51)	3 (4)	0 (0)	3 (4)	76 (100)
2014	27 (37.0)	35 (47.9)	1 (1.4)	0 (0.0)	10 (13.7)	73 (100.0)
2015	33 (44.6)	36 (48.6)	4 (5.4)	0 (0.0)	1 (1.4)	74 (100.0)

(2006～2015年度)

年度	全乳房切除術			乳房部分切除術						その他	不明	計	
	Bt	Bt+Ax	Bt+SNB	Bp	Bp+Ax	Bp+SNB	Bq	Bq+Ax	Bq+SNB				Tm+SNB
2006	1	7	3	6	7	21	0	0	0	0	5	5	55
2007	2	5	2	2	8	31	0	1	6	1	1	2	61

年度	全乳房切除術			乳房部分切除術						術前療法中	手術適応外	不明その他	計	
	Bt	Bt+Ax	Bt+SNB	Bp	Bp+Ax	Bp+SNB	Bq	Bq+Ax	Bq+SNB					Tm+SNB
2008	3	10	8	5	7	30	1	1	3	1	0	1	0	70
2009	2	6	7	3	3	42	1	5	10	0	2	0	0	81
2010	0	7	17	0	3	35	0	1	8	0	3	0	3	77
2011	0	2	17	0	5	28	0	1	2	0	2	0	4	61
検診	0	0	11	0	5	24	0	0	2	0	1	0	4	47
他施設	0	1	2	0	0	1	0	1	0	0	1	0	0	6
外来	0	1	4	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0	8
2012	0	6	12	6	5	46	0	1	10	0	0	0	3	89
検診	0	4	10	6	5	41	0	0	6	0	0	0	3	75
他施設	0	0	1	0	0	1	0	1	3	0	0	0	0	6
外来	0	2	1	0	0	4	0	0	1	0	0	0	0	8
2013	1	9	21	3	6	29	0	0	1	0	3	0	3	76
検診	1	5	19	3	6	25	0	0	0	0	3	0	2	64
他施設	0	1	1	0	0	2	0	0	1	0	0	0	1	6
外来	0	3	1	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	6
2014	3	5	19	3	2	25	1	1	3	0	1	0	10	73
検診	2	2	15	3	2	22	1	1	3	0	0	0	9	60
他施設	0	0	1	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	3
外来	1	3	3	0	0	1	0	0	0	0	1	0	1	10
2015	0	7	26	2	4	28	0	0	2	0	4	0	1	74
検診	0	2	22	2	4	25	0	0	2	0	4	0	1	62
他施設	0	0	2	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	3
外来	0	5	2	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	9

(注) Bt：全乳房切除術 Bp：乳房円状部分切除術 Bq：乳房扇状部分切除術 Ax：腋窩リンパ節郭清 SNB：センチネルリンパ節生検 Tm：腫瘍摘出術

度が大きい。患者の失望度や喪失感を軽減するため、最近では手術時の同時乳房再建やインプラント(人工乳房による再建)などの説明も行われ、さらに乳房再建の保険適応も実現し、乳房2次検診センターでも、そのような多様化する治療に対しての説明も行うようにしている。

また近年、腫瘍の大きな症例で全摘が必要な例に対して、術前に化学療法(抗がん剤治療)を施行し、腫瘍を十分に小さくしてから部分切除(温存手

術)を行うことも可能となり、比較的大きい腫瘍に対しても乳房温存の可能性が出てきたことは、患者には明るい材料となっている。また前述したように、乳房再建手術の保険適応の拡大などにより、乳がんと診断されてからの選択肢も多くなり、患者のQOLやその後の生活に重点を置いた治療も多くみられるようになってきている。

2015年度の乳房2次検診センターの大きな変更点としては本文中には記載しなかったが、針生

検や吸引式針生検という組織診を実施するようになったことである。2014年度までは比較的侵襲の少ない細胞診のみを実施し良悪性の鑑別をつけていたが、受診者の要望や乳がん罹患数の増加に伴い、当施設でも2015年6月より針生検(組織診)を開始した。2015年度は57例に実施し、悪性42例、良性15例の診断を行った。検体不適正や鑑別困難症例はなかった。組織診は東京大学医学部附属病院地域連携推進・遠隔病理診断センターを利用しており、東京大学のご協力で迅速かつ正確な診断を実施することができている。ここで東京大学と病理診断を請け負っていただいている東京大学の遠隔病理診断センター長の佐々木毅先生に重ねて感謝申し上げたい。

結語

乳房2次検診センターの年間実施成績の報告をした。2次検診センターの役割は、要精密検査と指示された受診者に対する的確な精密検査を実施すること、また精査の結果、治療が必要と思われた受診者を速やかに専門病院へ紹介するとともに、経過観察の必要な受診者を定期的に診察することと考えている。加えて、「異常なし」あるいは「良性」であると判断し、外来管理の必要のない受診者を速やかに定期検診に戻すことも重要な役割であると

認識している。そのことが受診者の保険診療にかかる金銭的負担や通院にかかる時間的負担を減少させ、また精密検査が本当に必要な受診者が速やかに受診できる環境をつくるための道筋となると考えている。今回、本会内で組織診を開始したことも、受診者の早期診断・早期治療につながることでであると確信している。

乳がんでない場合、良性乳房疾患の経過観察をする施設が都内で非常に少ない上、都内の乳腺専門外来は乳がん患者で混雑する状態が日常化しており、がん患者の定期通院と良性乳房疾患患者の定期通院の施設を分離していきたいという流れもある。そのような東京都の現状から鑑みても2次検診センターの存在意義は非常に大きいと思われる。

また、3次精密検査機関や治療機関へ紹介する場合、事前に2次検診センターにおいて、受診者に検査、治療の流れや治療法の内容などを説明することで、受診者の精神的な負担も緩和されていると思われる。最近では治療機関受診後に今後の治療法をめぐって家族を伴ってセカンドオピニオンを求めて来るケースもみられ、検診と治療の間において、受診者が気軽に相談できる窓口としての2次検診センターの役割は今後も増える可能性があると思われた。